

住井するゑとその文学の里(十九)

―牛久沼のほとり―

牛久市文化財保護審議委員

栗原 功くりはら いさお

小川芋銭と大飛行船ツェッペリン伯爵号

明治36年(1903年)にアメリカのライト兄弟が人類初の飛行機による動力飛行に成功しているが、日本にはこれより12年も前に自力で製作した飛行機で飛んだ二宮忠八(にのみやちゅうはち)という男がいた。二宮は幕末慶応2年(1866年)に伊



水戸上空を飛行中のツェッペリン伯爵号『茨城県議会100年写真集郷土百年』より転載。茨城県議会発行

予国よのくに、現在の愛媛県の夏・温州ミカン産地八幡浜市やわたはましの矢野町に生まれ、明治24年(1891年)の4月29日に「カラス型飛行機」に乗って地上を3m余り滑走して10m余りの飛行に成功した。

日本の航空軍事活動は明治37・38年の日露戦争中に気球(飛行船)による偵察が始まり、同42年に陸海両軍合同で兵器としての飛行機研究がスタートした。もう一方で、同43年(1910年)に陸軍が、大正元年(1912年)に海軍がそれぞれ欧米から輸入した飛行機で初飛行を行い、同3年勃発した第一次世界大戦に中国山東半島の青島のドイツ軍守備隊攻略戦に陸海軍用機10機(1機は飛行船)が初めて実戦参加した。

その後、海軍は大正5年(1916年)に神奈川県横須賀市追浜おっしほまにわが国最初の水上・陸上両飛行機練習基地を開設して航空隊と称した。4年後同隊は茨城県稲敷郡阿見村に移転し、霞ヶ浦海軍航空隊となった。以来霞ヶ浦海軍航空隊はわが国海軍の航空機搭乗、整備要員養成の中心機関になった。同隊(のちの予科練も含む)にパイロット

養成用に配備された主な機種は、当初はイギリス製水上・陸上飛行機であったが、昭和になると改良して国産された愛称『赤とんぼ』の九三式中間練習機、同12年に新たに開発された略称『零戦』の零式練習戦闘機一型などだった。

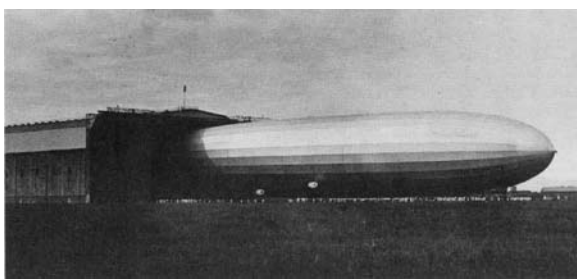
さらに海軍は大正7年(1918年)に飛行船を新たな戦略偵察兵器として導入を図り、横須賀の航空隊支隊内に飛行船隊(当初は地球隊)が設置された。阿見町刊『阿見と予科練』などによれば、同12年にその本部および兵舎が霞ヶ浦海軍航空隊の一角に移設され、ドイツから戦争賠償物件として押収してきた飛行船格納庫も移築された。同隊には練習用のアストラ、SS2号、SS3号の飛行船が各数機常時配備されていて、小川芋銭は度々これらの飛行船が牛久沼畔上空を飛行するのを眺めていた。

ところで第一次世界大戦で、ロンドン市民は毎夜、音もなく静かに忍び寄る大飛行船ツェッペリン伯爵号の恐怖におののかされた。そのツェッペリン伯爵号が世界一周のため、昭和4年(1929年)8月15日にドイツの飛行船基地フリードリッヒスハーフェンを飛び立った。同月29日の午後4時20分、西陽に巨大な銀色を輝かせながら霞ヶ

浦の300m上空に姿をみせ、東京・横浜上空を表敬飛行後の午後6時27分に霞ヶ浦海軍航空隊飛行船隊滑走路に着陸した。

小川芋銭俳句集によれば、
椎の上を飛行船など夏の雲

と、芋銭は牛久沼畔の椎の木の上空を飛行するツェッペリン伯爵号を詠んだ。ツェッペリン伯爵号とは、ドイツ陸軍の中将で退役したツェッペリン伯爵が私財を投げうって新たに開発製造した飛行船。全長が235.5m、最大直径30.5m、最大速度時速117kmの超大型飛行船(当初の飛行船は全長128m、直径12m程度で、搭乗員は



船長格の司令フーゴー・エツケナ博士以下、41名。歓迎会には幣原外相、宇垣陸相など政府高官が来隊した。一方、上野―東京間には臨時列車が出て、約40万の見物人が訪れた。

押収格納庫から出るツェッペリン伯爵号『阿見と予科練』より転載。阿見町発行